

【研究論文】

## 即興型高校生英語ディベート大会における 論題の公平性についての探求

小林良裕

(豊島岡女子学園中学高等学校 / 東京学芸大学)

### Exploring the Impartialities of Debate Motions in High School Parliamentary Debate Tournaments in Japan

KOBAYASHI Yoshihiro

(Toshimagaoka Joshi Gakuen Junior & Senior High School /  
Graduate School, The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei  
University)

Given that debate motions should be impartial, meaning both the affirmative side and the negative side can build and defend their case on an equal basis, it is essential for any tournament organizers or classroom practitioners to evaluate the debate topics they have used or are to use with due consideration of motion fairness. The present study focuses on the debate motions used at six high school English parliamentary debate tournaments in Japan, totaling 24 motions with 540 rounds' results. Quantitative analysis identified debate motions with great disparity between the affirmative winning ratio and the negative winning rate, which were then further analyzed qualitatively, yielding four traits that could partially account for the reason why the motions at hand were difficult for the affirmative side to win. In conclusion, the study suggests five considerations to be made when choosing motions for debate tournaments and classroom settings.

キーワード: 即興型ディベート、論題の公平性、高校生大会

Key words: Parliamentary debate, Motion impartiality, High school tournament

*Debate and Argumentation Education - The Journal of the International Society for Teaching  
Debate* 2022, Vol.4, pp. 2-19

## 1. はじめに

本研究の目的は、即興型英語ディベートの大会において、論題自体の特性によって勝敗が左右される場合があるのか<sup>1</sup>を検証し、今後の大会また授業内で用いる論題選定上の示唆を得ることである。

大会において適切な論題を選定する重要性は当然のものであるが、内藤・西村・竹内(2015)はさらに教室内でのディベート活動においても、準備型ディベートでは使用される論題が授業の教育的価値を大きく左右するという認識のもと、論題選びについての更なる研究の必要性を訴えている。

即興型英語ディベートにおいては過去 10 年、部活動としてだけでなく授業での実践が進んでいる(小林 2020)。この現状を受ければ、上記の内藤・西村・竹内(2015)の問題意識は即興型においても共有されるべきであり、むしろ論題を多く使用するこの形式においてこそ、論題の適切さについて調査が望まれる。

論題の適切さの基準としては、まずそれが肯定側と否定側の双方にとって公平であることが挙げられる。例えば、小西・菅家・Collins (2007)では好ましい論題の基準の 1 番目として「論争の余地がある」、そして 2 番目として「論題を肯定・否定する主要な議論が複数存在する」という点が挙げられている(p.23-24)。

しかしながら試合<sup>2</sup>の参加者からは時に、肯定側と否定側の一方が他方より有利だったのではないか、という懸念が持ち上がる場合がある。実際、準備型の大会においては、肯定側と否定側のサイド間の勝敗数の割合差の不均衡に関して、選手やディベートコーチから大会後の振り返りで言及されることがある<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 即興型ディベートでの勝敗の決め方に関しては、小林(2021)にその概要が記されている。また、即興型英語ディベートのルール自体については小林(2018)に詳しい。

<sup>2</sup> 本研究では、「試合」と「対戦」という言葉を区別して用いている。「この大会では予選 4 試合(round)が行われ、それぞれの試合では出場した 40 チームによる 20 対戦(match)が同時に進行した」というように、個々のチーム同士の組み合わせは「対戦」と呼称している。

<sup>3</sup> 一例として、一般社団法人全国英語ディベート連盟主催の、2016 年度の準備型英語ディベート高校生全国大会の予選結果を表の通りに示す。この表は酒主 (2021)のデータに基づき筆者が作成した。

第 11 回 全国高校生英語ディベート大会 予選結果

	各試合での肯定側・否定側が勝利した対戦数					
	Round 1	Round 2	Round 3	Round 4	Round 5	総数
肯定側 勝利	18	13	14	18	15	78
否定側 勝利	10	15	10	10	9	54
引き分け	4	4	8	4	8	28

同大会では各対戦につき、2 人のジャッジが割り当てられ、両名とも一方に投票した場合を勝利、また票が割れた場合は引き分けとした。大会には 64 チームが出場し、用いられた論題は「日本政府は、日本のすべての市民にベーシックインカムを給付する社会保障制度を採用すべきである(Resolved: That the Japanese government should adopt a social security system that provides a basic income to all Japanese citizens.)」であった。

酒主(2021)のデータは、英語ディベートのコーチとして活動する同氏が収集した過去 5 年ほどの大会の結果記録であり、その収集の意図としては大会の詳細な結果記録と分析である。大会運営者による直接のデータではないものの、同様の資料としては公開されているほぼ唯一のものであり、また同氏が直接大会に足を運び、また選手等から聞き取った情報に基づいたものであるため、資料的価値が高いと考えられる。2016 年の大会記録は、どの高校代表同士が対戦し

ある1つの論題を予選から本選まで継続して使用する準備型の大会とは異なり、各試合で異なる論題が用いられる即興型の大会でも、同様の懸念が存在すると認められる。実際、即興型の大会で現在使用されている主要な対戦組み合わせプログラムは、この懸念への対応として、各チームが肯定側と否定側を割り振られる回数が、出来る限り同数になるよう設計されている(Lee et al. 2021; 鈴木・行田 2006)。

以上の問題意識から、本研究は過去6つの即興型英語ディベート高校生大会で用いられた24の論題とその580の対戦結果に関して、肯定側と否定側の勝敗の割合に注目した。まず事実として勝敗の割合に偏りがあるのか検証し、次に偏りの認められた論題の特性を抽出し、最後に肯定側と否定側がより公平に試合を行える論題の選定方法を探った。

最後に、この研究手法は後述の、塩川(2018)のそれと対応したものになっていると明記しておく。日本の大学入試での英作文問題において、塩川(2018)は出題されるジャンルに偏りがあるとまず示し、その上でこの偏りを是正する作問例を示している。本研究でも同様に、まず即興型英語ディベートでの論題選定上の問題を特定し、その改善策を考案した後に、実際の大会で用いてその有効性を検証した。

## 2. 先行研究

### 2.1 英語教育における意見文作成上の困難に関する研究

内藤・西村・竹内(2015)によれば、近年ディベート教育についての研究は増加傾向にあり、国立情報学研究所のCiNii検索にて100件以上、研究報告が毎年新しく加わっているものの、論題についての研究は依然として二桁数に至ることはないという。このような現状においては、ディベート教育研究のみならず、隣接する英語教育の分野での研究成果を確認することも有益だと考えられる。

しかしながら、以下に概観する通り、意見文の指導に関する英語教育の先行研究でも、学習者に提示するトピック自体についての研究は始まったばかりである。本研究が主眼とする英語ディベートでの論題の難しさ、英語教育の分野での自由英作文のトピックの難易度についての研究は乏しい。

日本の大学入試の自由英作文問題においては、意見文が出題される頻度の高さが報告されている。Watanabe (2016)は、2013年度の中部地方の大学で出題された50の自由英作文問題を、中等教育での作文課題用に開発されたジャンル区切りで分類し、その結果、意見文(Expositions)と自分が好きな映画について説明するといった個人的感想(Personal reflections)が全体の83.9%を占めていると報告している。このWatanabe(2016)の調査の枠組みを踏まえた塩川(2018)の追調査では、2000年から2017年の国公立大学の入試で用いられた1587の自由英作文問題が分析され、全体の28.4%が意見文、48.0%が個人的感想であったと示されている。

---

たのかについて、データの一部に欠落があるものの(全160対戦のうち3対戦)、各試合の勝敗結果の総数については計算が可能であったため、筆者の責任において表の通りに結果を整理した。引き分けとなった対戦を除外した場合、肯定側の勝利数は否定側の1.44倍(小数点第3位を四捨五入)となった。肯定側と否定側が個々のジャッジから得た票数をそれぞれ合計した場合(勝利すれば2票、引き分けなら1票、負けなら0票)もまた、肯定側が148票、否定側が98票となり、肯定側が否定側の1.51倍(小数点第3位を四捨五入)勝利判定を受けていた。

ライティング指導の研究のうち、中高生を対象とした調査の大半は、指導の言語習得への効果を検証することを目的としている。例えば日本の中高生のライティング指導について調査を行った小宮山(2018)においては、生徒に対し英作文の流暢性を高めるための 10 分間の自由英作課題を継続して与え、産出された英文を分析することで主にその結果を検証している。

ディベートの論題を扱う本調査にとってより関連の高い、Watanabe (2016)そして塩川(2018)の枠組みにおける「意見文」というジャンル自体の特性を踏まえた研究は、一定の英語能力を既に習得した、大学生へのアカデミック・ライティング指導という文脈において主に見られる。Zhu (2001)では、スペイン語を母語とするアメリカの大学の博士課程在籍者 14 名に、英語で意見文を書く過程で感じる困難について聞き取り調査を行った。その結果、論証の構成と内容の展開に関して特に困難を感じていることが分かった他、学習者の文化的背景、第 1 言語での作文経験などが影響していると結論づけている。

以上の通り英語教育の分野においては、英語で意見文を書かせることは大学入試において頻出であり、中高生への自由作文指導において大きな比重を占めていると考えられる一方で、その内容面での指導は大学レベルが主に担うものと捉えられている。またその指導上の大きな課題は、文章のレトリックという一般的な語学指導を越えた領域に関わっていると報告されており、実際のところ国際的な語学カリキュラムの枠組みでも、ジャンル特性についての指導は参考程度の記述にとどまっている<sup>4</sup>。

最後に参考として、国語教育においては、意見文作成における特定の介入指導の効果を検証する研究が報告されていることに触れたい。例えば清道(2010)は、日本の高校生 30 名に対して短時間、定型的な型を用いた意見文作成の指導を行い、その結果を対照群と比べることでこの指導の有効性を示している。この研究にあるように、現在のところの国語教育での主な関心は、意見文作成で学習者が直面する困難の克服にあり、トピック自体の難易度についての研究は途上であるといえる。

## 2.2 ディベートの論題の適切さに関して

即興型ディベートの論題についての日本での研究も、まだその黎明期にあると言える。即興型ディベートの論題をテーマとした国内ではほぼ唯一の論文と言える綾部 (2016)は、日本と海外の即興型大会の論題の傾向を調査し、政策論題と価値論題といったこれまでの分類にとどまらず、扱う分野群においても即興型の論題は近年より多彩になっていると報告している。

準備型ディベートの研究調査として、薛・張 (2020)は 2016 年と 2017 年度の上海外国語学校で開催された準備型日本語ディベート大会の振り返りを行い、今後の大会開催で克服すべき課題を幾つか

---

<sup>4</sup> これら第 2 言語習得の分野での実証研究を踏まえた上での、ディベート指導上参考となる実践的知見は、その一部が体系化されつつある。ディベート活動の難易度の指標としては、例えば国際的な言語学習到達目標である CEFR(Council of Europe 2018)では、産出活動のうち“Sustained monologue: putting a case (e.g. in a debate)”というカテゴリーにてディベートの立論部分にはほぼ相当する can-do デスクリプタが記載されている(p.72)。これは立論のスキルの熟達段階のモデルとして、指導者にはスキル指導のカリキュラム作りにおいて大いに参考になると考えられる。その一方で論題の難易度については、この CEFR においても「身近なものから、社会問題へ」という常識的な情報が得られる程度である。

挙げた。調査者が報告した論題に関しての問題には、1) 論題の文言が曖昧であったため、複数の試合でその解釈で混乱した大会があったこと、2) 論題について背景意識を持たない選手が的外れな立論を行った試合があったこと、3) 1つの大会で用いられた複数の論題が、政策論題や価値論題という分類において論題の種類が異なっていただけでなく、「各論題の難易度が異なる」ので、「評価の基準が統一され」難かった点が、主な論題の課題として列挙されていた(p.22)。

実践に基づいた知見として、調査型英語ディベートの試合において好ましい論題の条件が前述の小西・菅家・Collins (2007)では挙げられている。姉妹本である生徒用の教材に対応した、その教員用の指導書内では、7基準が授業で扱う論題候補の条件として示されている：

基準 1： 論争の余地がある

基準 2： 論題を肯定・否定する主要な議論が複数存在する

基準 3： 参加者に関連がある社会的な事象を扱う

基準 4： 資料を調査しやすい

基準 5： 1つのトピックを扱っている

基準 6： 中立的な表現で書かれている

基準 7： ディベートを終えるまで状況が変わらない

(小西・菅家・Collins 2007、 pp.23-25)

これらの条件は、即興型においても考慮されるべき点である。授業だけでなく、大会においてもこれらは守られるべきであり、また実際違反していると考えられる論題が出題されることはまずないであろう。それであれば尚更、もしある大会において肯定側と否定側に著しい勝敗割合の差が見られるならば、上記の基準だけでは説明がつかず、さらなる基準の精緻化が求められる。実際、これらの基準を満たしていた論題を用いた調査型の英語ディベート大会において、肯定側・否定側の勝利の割合に一般的な感覚では許容しがたい程の差が生じることはある(一例として、巻末の注3のデータを参照)。もし勝敗を左右する論題の特性が明らかになるのであれば、公平な大会運営のためにも、それを取り除く、または緩和する方法が求められる。以上の懸念は、即興型ディベートにおいても同様である。

### 3. 研究課題

本研究は、以下をその研究課題とした。

- (1) 高校生即興型英語ディベート大会において、肯定側と否定側の勝敗の割合の差はどの程度か。
- (2) 肯定側と否定側の勝敗の割合の差が大きくなる論題があるとして、その論題の特性は何か。
- (3) 肯定側と否定側の勝敗の割合の差が大きくなる論題があり、その様な論題の特性が同定されたとして、その特性を持つ論題の使用を避けた大会では、実際に勝敗の割合の差が小さくなるのか。

## 4. 方法

### 4.1 調査対象

研究対象は、2018年6月から2021年3月までの期間に各3回開催された、初心者と中級者向けの即興型英語ディベート大会である「新緑杯」(毎年6月開催)と、各都道府県の代表校チームが競う

「連盟杯」(毎年 3 月開催) で用いられた合わせて 24 の論題と、その 580 試合の対戦結果である。新緑杯では決勝トーナメント無しの 4 試合が、また連盟杯では予選 4 試合に加え、準々決勝からの決勝トーナメント 3 試合が行われた。本研究は一般的な論題の傾向を掴むことを目的とするため、連盟杯の決勝トーナメントの論題と試合結果は分析対象から除外した。両大会の参加者チーム数と論題は表 1 と表 2 の通りである。両大会とも、第 2 試合からパワーマッチ(勝利数が同数同士のチームで対戦組み合わせを行うこと)が行われている。

両大会を研究対象とした理由は、対戦結果と論題が一般に公開されていること、また過去 10 年にわたり定期開催されていることから、一般に大会の趣旨がある程度理解され、近年の双方の大会出場者のディベート経験歴を大まかに「初心者・中級者」層と、「上級者」層に区分して分析が可能と考えられるからである。また大会規則において、新緑杯ではチーム内に必ず 1 名以上ディベート歴が 1 年未満の選手を含めることが求められており、この点からも両大会の選手層に違いがあると前提できる。

両大会で使用されている論題は、論題選定委員の 1 名がまず候補を選ぶ。候補は主に、国内外の大学生大会で使用された論題を借用しており、日本の高校生大会であることを踏まえ、必要に応じて細部の語句を変更している。候補の案とその選定の理由を他の数名の論題選定委員と共有し、最終的な論題と大会で使用する順番を確定させている。

## 4.2 研究方法

### (1) 肯定側と否定側の勝利の比率

異なる論題で争われた 24 の試合ごとに、それぞれ肯定側が勝利した試合数と否定側が勝利した試合数の比率に差が認められるかを、二項検定により分析した。また、24 の試合全体について同様に差を分析した。

また本研究では、初心者・中級者間の大会結果と上級者間の大会結果の 2 種類が扱われている。データの整理と両者の比較のため、新緑杯の 3 大会をまとめた勝敗結果、連盟杯の 3 大会をまとめた勝敗結果について、肯定側と否定側の勝敗の比率の差を二項検定により別個に分析した。

### (2) 勝敗の割合に差が大きかった論題の特徴

次に、肯定側と否定側の勝利の比率に一定の差が生じた論題に注目し、その共通性を見ることで、肯定・否定のサイドの違いが勝敗を左右しかねない論題の特徴を探った。特徴を抽出する作業においてはまず予備調査として、ある都内の高校の英語ディベート部の部員 9 名から、練習や大会で用いる論題の肯定側・否定側の公平性について聞き取り調査を行った。この部活は、過去 5 年以上にわたり活動を行っている部で、本研究で調査対象とした両大会での入賞経験もある。聞き取りは、放課後の練習時間において行われた。

次に部員の発言を踏まえた上で、大学生時代からの即興型英語ディベート歴が約 10 年である同部活の顧問の 1 名からも聞き取り調査を行い、選手が感じている論題の公平性を保つ上での障害を共に検討した。これを元に、否定側が有利になると選手が感じる論題の特徴を集約し、まず 3 特性に整理した。この聞き取り調査から抽出した 3 特性を踏まえ、実際に勝敗の比率に差が出た論題の共通性を探った。分析の結果については、上述の部活顧問とは別の即興型英語ディベート歴が 10 年以上の現

役ディベートコーチ<sup>5</sup>に協力を求め、分析の妥当性について筆者と検討した。

特性の検証作業の一環として、肯定側・否定側の勝敗の割合差が大きくなかった論題では、それら特性は逆に認められないのか判定をした。作業では筆者と上述の現役ディベートコーチが別々に判断し、判断が分かれた場合は合議により定めた。その上で、さらに上記の部活顧問にも同様に判定を依頼し、判定の信頼性を検証した。

表 1 : 調査対象となった大会の概要①「新緑杯(初心者・中級者大会)」

年度	チーム数	試合数	論題
2020	38	4 試合 (19 対戦)	Round 1: This house would pay all elected politicians the median wage in their country. Round 2: This house would give national treasures (like the Rosetta Stone in the British Museum) back to their countries of origin. Round 3: This house believes that only countries with good human rights records should be allowed to host the Olympics. Round 4: This house would legalize surrogacy for profit in liberal democracies.
2019	72	4 試合 (36 対戦)	Round 1: This House believes that professional sports players should be allowed to enhance abilities by using drugs. Round 2: This House, as an individual, would not consume works produced by immoral artists. Round 3: This House believes that debating skills matter in getting a boyfriend or a girlfriend. Round 4: This House would mandate retirement from the National Diet at age 65.
2018	52	4 試合 (26 対戦)	Round 1: This House believes that schools should not punish students for information found on social networking sites. Round 2: This House believes that nuclear weapons make the world a safer place. Round 3: This House believes that new movies, or new TV shows which contain smoking scenes should be banned or alternatively any such scene should be removed. Round 4: This House believes that individuals should be able to sell their vote.

表 2 : 調査対象となった大会の概要②「連盟杯(上級者大会)」

	チーム数	試合数	論題
2021	44	4 試合 (22 対戦)	Round 1: This house believes that the age of digital information (e.g. social media, online news, etc.) has done more harm than good in protecting democracy. Round 2: Given the technology, this house would erase society's memory and

<sup>5</sup> 本論文の協力者であるディベートコーチは、国内外の大学生大会で入賞経験があり、全国の中学高校で英語ディベート指導を行っている、小野暢思 (Tokyo Debate Academy 代表) 氏である。

			evidence of the criminal past of former convicts after their release from prison. Round 3: This house prefers a world without lying. Round 4: This house believes that, assuming Personal Protective Equipment is sufficiently available, medical workers during a pandemic should have the right to opt out of service.
2020	42	4 試合 (21 対戦)	Round 1: This house would abolish the Olympic Games. Round 2: This house would prohibit criminals from publishing descriptions of their crimes. Round 3: This house believes that the state should not subsidize art. Round 4: The house believes that feminist movement should oppose affirmative action for women.
2019	42	4 試合 (21 対戦)	Round 1: This house would ban beauty contest. Round 2: This house would introduce conscription. Round 3: This house would completely ban broadcasting of suicide. Round 4: This house would ban all forms of gambling.

### (3) 肯定側と否定側に公平な論題の大会での検証

本研究の最後の段階として、筆者が論題選定委員の 1 人を務める高校生即興型英語ディベート大会において、否定側が有利になる論題特性の影響が緩和されるよう配慮して、論題候補を選定し実際の試合結果を検証した。論題は筆者がまず過去 20 年の海外の大学生大会から一次候補を選んだ。その上で通常の大会と同様の基準で、他の複数名の論題選定委員と協議して最終的に大会で用いる論題を選定した。

試合結果を受け、否定側が勝利した試合と否定側が勝利した対戦数の比率を二項検定により分析した。具体的にこれらの作業は、初心者・中級者大会である 2021 年 6 月の新緑杯において、研究の趣旨を説明した上で大会運営責任者の許可を受け実施した。

## 5. 結果と考察

### 5.1 肯定側と否定側の勝敗の割合の差

各試合における肯定側と否定側のサイドごとに、それぞれ試合に勝利した割合を表 3 に示す。数量的分析では SPSS (ver.28) を用いた。第 1 試合から第 4 試合まで、それぞれ個別に二項検定を行った結果、新緑杯 2018 年の第 4 試合において 5%水準で有意差が得られ( $p = .031$ )、否定側サイドのチームの方がより勝利していたと判定された。

表 3：論題ごとの肯定側・否定側の勝敗の割合(%)と総数

		勝利チームの割合 (勝利対戦数)			
		Round 1	Round 2	Round 3	Round 4
新緑杯 2020	肯定側	68.4 (13)	36.8 (7)	42.1 (8)	47.4 (9)
	否定側	31.6 (6)	63.2 (12)	57.9 (11)	52.6 (10)
新緑杯 2019	肯定側	33.3 (12) †	33.3 (12) †	44.4 (16)	47.2 (17)
	否定側	66.7 (24)	66.7 (24)	55.6 (20)	52.8 (19)
新緑杯 2018	肯定側	30.8 (8) †	42.3 (11)	42.3 (11)	26.9 (7)*
	否定側	69.2 (18)	57.7 (15)	57.7 (15)	73.1 (19)
連盟杯 2021	肯定側	50.0 (11)	45.5 (10)	59.1 (13)	40.9 (9)
	否定側	50.0 (11)	54.5 (12)	40.9 (9)	59.1 (13)
連盟杯 2020	肯定側	40.9 (9)	54.5 (12)	59.1 (13)	36.4 (8)
	否定側	59.1 (13)	45.5 (10)	40.9 (9)	63.6 (14)
連盟杯 2019	肯定側	38.1 (8)	33.3 (7)	47.6 (10)	38.1 (8)
	否定側	61.9 (13)	66.7 (14)	52.4 (11)	61.9 (13)

注: 小数点第 2 位四捨五入、また検定結果は肯定側にのみ記号で表示

†  $p < .10$  \*  $p < .05$

検定結果ではこの 1 試合のみ有意差が出た一方で、新緑杯 2019 年の第 1 試合、第 2 試合の様に勝利の割合に 2 倍程度の差が出ている試合もある。これは一般的な感覚としては十分に大きいと感じられ得る差であるが、各試合の対戦のデータ数が 100 以下であったため、検定結果として有意差が出なかった可能性も排除できない。検定結果としては、新緑杯 2019 年第 1 試合 ( $p = .067$ )、2019 年第 1 試合 ( $p = .067$ )、2018 年第 1 試合 ( $p = .078$ )において、有意傾向が得られた。

また、調査対象の全ての試合結果(肯定側の総勝利は 249 対戦、否定側の勝利は 331 対戦)に対して二項検定を行った結果、否定側が勝利した試合の割合が有意に高かった( $p < .01$ )。

初心者・中級者間の試合結果と、上級者間の試合結果の比較もまた行った。大会で総数 324 の新緑杯の試合のうち、肯定側が勝利した対戦数は 131(40.4%)、否定側が勝利した対戦数は 193(59.6%)であった。これに二項検定を行った結果、否定側の勝利の割合が有意に高かったことが示された( $p < .001$ )。対して上級者大会である連盟杯の 3 回の結果では、総数 256 試合のうち肯定側の勝利は 118 対戦(46.1%)、否定側の勝利は 138 対戦(54.0%)となった。新緑杯とは異なり、二項検定の結果では有意差は得られなかった ( $p = .235$ )。

この点からは、より能力の高いディベーター間の試合では、論題の特性に勝敗を左右されることが初心者・中級者間の試合よりも少なく、肯定側と否定側のどちらを割り振られていても勝利することが可能であると示唆される。

## 5.2 勝敗の割合に差が大きかった論題の特徴

検定結果で割合の差に有意差が出た 1 試合、有意傾向の出た 3 試合に加えて、一方の勝敗の割合が 40 パーセントを切っている 6 つの論題を、今研究では勝敗の割合に差が大きかった論題と操作的に定義し、それら 10 個の論題に着目し、その特徴を質的に分析した。有意差また有意傾向を見せなかつ

た 6 つの論題を分析対象に加えた根拠は次の 2 点である。まず肯定側・否定側の一方の勝率が 40%を割った場合、大会運営上の経験から選手から論題の公平性について不満が出る懸念があり、この点は本研究の協力者である後述のディベートコーチ 2 名から同意を得た。

また本研究と同様に二項検定を用いた研究の例として、高校野球において先行と後攻の選択結果が勝率にどう影響を与えるかを、過去 20 年間の夏の甲子園の試合結果を基に検証した末木(2018)について言及したい。この研究では、同程度の実績校同士の 358 試合において、先行の勝率が 44.7%(160 試合)となり、5%水準で二項検定での有意差が得られている( $p = .025$ )。英語ディベートの大会結果を扱った本研究では、過去 3 年の試合結果をデータとしており、末木(2018)と比べ試合結果のサンプル数が少ないことは本研究の限界として明記したい。

有意差が出なかったものの、上記の通り現実的な目安として、一方の勝率が 40%を割った試合は、主観的な印象である指摘は免れないものの、論題の公平性に疑問が生じうる論題であり、現実的な指標として「勝敗の割合に差が多かった論題」として以下の分析では扱っている。

研究手法に述べた手順通り、ある高校の英語ディベート部に所属する 9 名の高校生と同部顧問の 1 名からの聞き取り調査を行い、否定側が肯定側に対して有利になる論題の特性をまず 3 点抽出した。

これに加え、筆者と研究協力者であるディベートコーチ 1 名との検討の結果、3 番目の特性はさらに 2 種類に分割することが妥当という結論に至った。また、肯定側の方が勝利の割合が高かった試合についても、その原因を検討した。最終的に抽出された特性は、表 4 の通りとなる。

各特性について説明すると、「特性① 道徳的立場」とは社会で一般的に受け入れられている道徳的な考えとは反する主張を肯定側がしなければならない場合である。選手への聞き取り調査では、「モラル・ハイグラウンド (moral high ground)」という言葉で選手は言及しており、道徳的に相手チームより高い位置から議論をすることが可能かどうか、という観点である。例えば「学校での体罰を支持する(This house supports corporal punishment in schools)」という論題では、肯定側は一般的な社会常識からは受け入れがたい立場に立つことになる。逆に、論題によっては否定側が道徳的に不利な立場に置かれる場合もあるが、肯定側不利となる原因の特定を目的とした今回の分類では、肯定側がその責を負う場合にのみ注目した。

表 4：勝敗に影響を与え得る論題の特性（肯定側の負担）

概要		
特性①	「道徳的立場」	道徳的に抵抗感がある立場に立って肯定側が議論をする必要がある。
特性②	「モデルの提示」	肯定側が論題を具体的なモデル(政策案)として提示する必要がある。
特性③-1	「背景知識」	論題の背景知識を肯定側が説明する責任が大きい。
特性③-2	「古典論題」	古典的な論題であり、試合の内容について定石が存在する。

「特性② モデルの提示」とは、与えられた論題がそのままでは抽象的であり、具体的な政策モデル・ケースを示して試合全体の土台を肯定側が作る必要性に関わる。同じく体罰の例を用いると「どの学年の生徒に対して、どのような場合において、どの様な方法で行う体罰を合法とするのか」について明確な政策案を出さなければ肯定側と否定側でその是非を問う対象に齟齬が生じ、試合が混乱する懸念がある。このような混乱が生じた場合、一般的な勝敗の判断ではこの責を負うのは肯定側とさ

れており、肯定側を負けとする理由となり得る(小林 2018)。

検証の結果さらに 2 分割された 3 番目の特性は、論題についての知識に関する項目である。上述の体罰に関する論題は、即興型英語ディベートにおいては古典論題とされるものであり、2005 年度の第 25 回大学生世界大会 (World Universities Debating Championship, 25th MMU Worlds)では決勝戦において用いられた。古典論題とは、何度も練習会や大会で用いられ続けている論題であり、その論題に関して定義と議論内容に定石がある。この体罰の例では、実際に学校での体罰が実施されているシンガポールでの実例を政策モデルとして肯定側が詳細に提示することが期待されている。古典論題の場合、その場で思いつく程度の政策案や議論では、否定側からその不備を指摘され勝利が困難であると、聞き取り調査では選手とコーチが説明していた。

「特性③-2」はその論題についてディベート・コミュニティにおいて常識とされている知識の有無に関するものであり、対して「特性③-1」はその論題が背景とする一般社会的な知識の有無に関連する。例えば、2021 年度の大学生世界大会(Korea WUDC 2021)の予選第 1 試合の論題は、“This house, as South Korea, would aim to significantly increase its cross-border economic corporation with North Korea.”というもので、一般的には経済協力による地域緊張の緩和をテーマとする論題だが、朝鮮半島情勢について固有の知識が無ければこの試合を十分に戦うことが出来ない。

この特性に関して、否定側は仮に論題について知識が無かった場合でも、肯定側の最初のスピーチを聞けば、その背景知識を補うことが可能である。また肯定側が十分に背景知識を提供できなければ、否定側はそれを肯定側の議論の不備とする反論を中心として、試合を戦うことが出来る。以上の点から、背景知識が求められる論題において、特に肯定側が不利になり得ると考えられる。

以上の特性の有無について、勝敗の割合に偏りがあった論題ごとの判定結果は、表 5 の通りである。

**表 5 : 肯定側に負担となる論題の特性の有無 (サイドによる勝敗の割合に偏りが高かった試合)**

			論題の特性 (肯定側の負担)			
			1 道徳的立場	2 モデルの提示	3-1 背景知識	3-2 古典論題
【肯定有利】	新緑杯 2020	R1 (68.4)	N/A	N/A	N/A	N/A
【否定有利】	新緑杯 2020	R2 (36.8)	N/A	A	N/A	A
	新緑杯 2019	R1 (33.3)	A	A	N/A	A
	新緑杯 2019	R2 (33.3)	N/A	N/A	A	A
	新緑杯 2018	R1 (30.8)	A	N/A	N/A	N/A
	新緑杯 2018	R4 (26.9)	A	A	A	N/A
	連盟杯 2020	R4 (36.4)	N/A	A	A	N/A
	連盟杯 2019	R1 (38.1)	N/A	A	N/A	A
	連盟杯 2019	R2 (33.3)	A	A	N/A	A
	連盟杯 2019	R4 (38.1)	N/A	N/A	N/A	A

注: A は「該当する」、N/A は「該当せず」を意味。試合番号の脇の数値は、その試合の肯定側の勝率(%)を示す。

この特性の判定の妥当性については、研究手法において述べた通り、まず作業の第 1 段階として、筆者と上述の現役ディベートコーチが別々に判断し、判断が分かれた場合は合議により定めた<sup>6</sup>。その

<sup>6</sup> 脚注 5 で既述の通り、本論文の協力者であるディベートコーチは、国内外の大学生大会で入賞経験があり、全国の中学高校で英語ディベート指導を行っている、小野暢思 (Tokyo Debate Academy 代表) 氏である。

上で、同じく研究協力者である高校の英語ディベート部の顧問 1 名に、別個に判定を依頼した。この顧問による判定と、第 1 段階の判定とのカッパ係数を求めた。その結果、 $k = .61$  という高いカッパ係数が確認された。判定のずれは主に、論題についての知識が「3-1 背景知識」に含まれるか、それとも「3-2 古典論題」に属するの点で見られた。高校の選手の実情を見ている顧問と、大学生へのディベート指導も行っているディベートコーチとの間の認識の違いが背景にあるのではと推察される。判断の異なった項目について、その英語ディベート部の顧問との再度の合議を経て決定した最終結果が表 5 と表 6 である。

表 6 : 肯定側に負担となる論題の特性の有無 (勝敗の割合の偏りが低かった試合)

		論題の特定 (肯定側の負担)			
		1 道徳的立場	2 モデルの提示	3-1 背景知識	3-2 古典論題
新緑杯 2020	R3 (42.1)	N/A	N/A	A	N/A
	R4 (47.4)	N/A	A	N/A	A
新緑杯 2019	R3 (44.4)	N/A	N/A	N/A	N/A
	R4 (47.2)	N/A	N/A	A	N/A
新緑杯 2018	R2 (42.3)	N/A	N/A	N/A	A
	R3 (42.3)	N/A	N/A	N/A	N/A
連盟杯 2021	R1 (50.0)	N/A	N/A	N/A	N/A
	R2 (45.5)	N/A	N/A	N/A	A
	R3 (59.1)	N/A	N/A	N/A	N/A
	R4 (40.9)	N/A	N/A	N/A	N/A
連盟杯 2020	R1 (40.9)	N/A	N/A	A	N/A
	R2 (54.5)	N/A	N/A	A	N/A
	R3 (59.1)	N/A	N/A	N/A	A
連盟杯 2019	R3 (47.6)	N/A	N/A	N/A	A

注: A は「該当する」、N/A は「該当せず」を意味。試合番号の脇の数値は、その試合の肯定側の勝率(%)を示す。

表 5 からは、否定側有利となった論題は全て、最低 1 特性を備えていたことが分かる。「新緑杯 2019 年・第 1 試合」、「新緑杯 2018 年・第 4 試合」、「連盟杯 2019 年・第 2 試合」は、3 特性を備えていた。他の論題では「新緑杯 2018 年・第 1 試合」と「連盟杯 2019 年・第 4 試合」が 1 特性だけ持ち、残りの論題は全ていずれかの 2 特性を有していた。

肯定側が有利であった新緑杯 2020 年・第 1 試合は、1 つも特性を備えていないことが確認された。試合で争われる政策案は論題から自明であり、政治・選挙制度についての一般的な知識以上の情報は必須ではない。市民の代表である政治家への報酬は、平均賃金よりも現状高くなっている点から、政治家の高給を擁護する立場になる否定側はむしろ特性①での道徳的に不利な立場にあると解釈できる。

肯定側と否定側との間での、勝敗の割合の差が少なかった (片方の勝率が 40% を割っていない) 論題に対して、これら特性の有無を確認した結果が表 6 である。「新緑杯 2020 年・第 4 試合」が 2 つ特性を備えている他に、特性を 1 つ有していると判断された論題は 8 つあった。

以上の結果からは、これら特性の有無と勝敗結果の偏りにある程度の関連性を見出すことが出来ると言える。しかしながら表 6 の結果の通り、特性を有するにも関わらず勝敗の割合の差が低かった論

題が存在することから、これら特性以外にも勝敗の偏りを左右する要因があることが示唆された。

可能性の 1 つとしては、古典論題であったとしても、肯定側がその論題についての知識を持っていれば、むしろ有利な立場に立つことが可能だった点が挙げられる。また、「新緑杯 2020 年・第 1 試合の様」に、肯定側が否定側に対し、道徳的立場において優位に立つ論題であれば、他の点での不利を補うことが可能であった可能性が考えられる。

さらには、前節で行った初心者・中級者間の試合結果と、上級者間の試合結果の比較では、前者の方が後者よりも偏りが大きかったことが検定の結果から明らかになっている。上級者であれば、その練習経験から論題に対する知識を有しているため、「特性② モデルの提示」、「特性③-1 背景知識」、そして「特性③-2 古典論題」が初級・中級者と比べ障害にならなかったのではと推察できる。

「3-1 背景知識」に関して、この項目を単独で見た場合、表 5 と表 6 の結果からは、公平性の弁別に関与しているとは認めがたい。しかしながら「3-2 古典論題」と組み合わせて、「議論をする上で必要な論題固有の知識が必要な否か」に関する項目として 1 つに合算した場合、弁別性を認めることができる。改めてこの 3 番目のカテゴリーを細分化する必要があるか、今後の検討課題となる。

今回の調査では、研究の手始めとして、肯定側と否定側間の公平性に関与する論題の特性を探ることに主眼を置いたため、各特性の影響の大小を数量的に調査するには至っていない。また各特性の初心者・中級者への影響と、上級者への影響の大小についても、本研究では各試合の対戦組み合わせについて、上級者同士の試合であるのか、そうでないのかデータがないため調査を行えていない。本研究の限界として、これらの点を明記しておく。

### 5.3 肯定側と否定側の勝敗の割合差が大きい論題の特性を緩和する方法

前節で明らかになった特徴を踏まえ、これらの特徴を持つ論題を避けて大会で使用した場合、実際に肯定側と否定側の勝敗の割合の差を抑えることが出来るかどうか検証した。塩川(2018)では、大学入試では扱われることの少ないジャンル群を特定し、それらジャンルの特徴がどう大学入試で出題する上での障害となるのか検討されている。塩川(2018)では次に、それらの障害を取り除く方策を作問例とともに示し、実践上の示唆を与えている。即興型英語ディベートの論題の公平性を研究対象とする本調査においても、この研究デザインに倣い前節までの知見を踏まえた著者による実践報告を通して、より公平な論題選定への具体的な示唆を示す。

同じ論題を繰り返し用いる準備型の大会では、否定側にやや有利とも言える論題は、一概に完全に排除するべきものとは言えず、各チームに割り振られる肯定側と否定側の回数が同数になるよう対戦組み合わせをすれば、一定の公平性を担保できると考えられる。対して、同じ論題を一度しか用いない即興型においては、たとえ全体の肯定側・否定側の回数が同じであっても、対戦組み合わせのめぐり合わせによって、否定側に有利な論題で否定側として戦えるチームもあれば、そうではないチームも発生する。この点から、即興型の大会で用いる個々の論題の選定において、前節までに明らかになった特性の影響を考慮することが強く求められる。

しかしながら同時に、新緑杯と連盟杯の大会結果の分析から、それら特性の影響は特に初心者・中級者が主に参加する大会において強く見られ、対して上級者間での試合ではその影響は出にくいということが示唆された。以上より、論題選定にあたって肯定側・否定側の公平性を保つために配慮する内容として、以下の 5 点を導いた。

- ① 高校生にとって常識的に主張が困難な立場で議論をする必要のない論題を用いる。
- ② 初心者・中級者向けの大会では、肯定側が論題を定義し政策モデル・ケースとして提示する負担が重くない論題を用いる。また、具体的な政策モデル・ケースが必要になる論題では、その論題の文言自体にあらかじめ肯定側がそのまま用いることが可能な政策モデル・ケースを組み込んでおく。
- ③ 初心者・中級者向けの大会では、その大会で用いられる可能性のある古典論題リストを提示し、参加者にそれらの事前学習を促す。
- ④ 初心者・中級者のチームと上級者のチームが対戦する可能性がある、ランダムで組み合わせられる試合では、肯定側・否定側の勝敗を左右しかねない特性を出来るだけ排除した論題を用いる。
- ⑤ 勝敗数と個人得点の順位によるパワーマッチで対戦組み合わせをする予選後半の試合では、上級者チーム同士が対戦することになる点、また大会予選の最も大切な役割は能力の高いチームを選抜することにある点から、肯定側と否定側で有利・不利が発生する可能性がある論題であっても、著しく一方に不利な論題でない限り使用の制限を緩和する。

それぞれ、以下の考察から導いた。まず 1 点目については、大学生大会で使用されている、高校生にとっては扱いづらい論題（例えば、アルコールや薬物乱用に関する論題など）を避けるという内容である。この点については、以前より高校生大会では配慮が求められている点ではあるが、上述の「特性①」との対応を踏まえ、改めてここに挙げた。2 点目と 3 点目はそれぞれ、「特性② モデルの提示」と「特性③-1 古典論題」を踏まえている。4 点目と 5 点目は、数量的な分析から示した通り、論題の特性は、上級者に対してよりも、初心者・中級者に対してより勝敗に影響を与えるという点を踏まえると共に、上位入賞者を決めるというそもそもの大会の役割を考慮した観点である。

筆者が主論題選定委員を務める 2021 年 6 月開催の新緑杯において、上記の 5 点を考慮して論題選定を行った（正確には、1 点目は従来より考慮されていた内容であり、2 番目以降が今回新たに取り入れた観点である）。筆者が選定した論題案とその出題意図は、巻末の資料の通りの書面で他の選定委員に提示され、協議を経て実際に大会で用いられた。オンラインで実施されたその大会の規模と使用された論題は表 7 にまとめられる。またその大会の肯定側・否定側の対戦結果をまとめたものが表 8 である。

表 7 : 2021 年度新緑杯の概要と論題

チーム数	試合数	論題
46	4 試合 (23 対戦)	Round 1: This house would designate one city to permanently host the Olympics. Round 2: This house would aggressively prioritize the posting of female diplomats to countries with poor women's rights records. Round 3: This house would ban the display of art created with the intended purpose or reasonably likely outcome of creating offence. Round 4: This house believes that if technology permitted us to identify people who are genetically predisposed to commit crimes, it would be appropriate for the state to monitor

them and limit their activities.

表 8 : 2021 年度新緑杯の論題ごとの肯定側・否定側の勝敗の割合(%)と総数

		勝利チームの割合 (対戦数)			
		Round 1	Round 2	Round 3	Round 4
新緑杯 2021	肯定側	34.8 (8)	47.8 (11)	43.5 (10)	43.5 (10)
	否定側	65.2 (15)	52.2 (12)	56.5 (13)	56.5 (13)

第 2 試合から第 4 試合にかけては、肯定側と否定側の勝利の割合はほぼ同等の結果となった。しかしながら、第 1 試合にて 2 倍近くの勝敗の割合の差が生じる結果となった。オンライン実施であったため、その試合直後に選手とジャッジへの聞き取り調査は行えなかったものの、参加した 2 チームと 1 名のジャッジから、この論題で肯定側を割り振られた場合の困難について、後日聞き取りを行うことが出来た。そこで言及された内容をここまで議論した論題特性の観点で整理すれば、以下の通りになる。

- [特性① 道徳的立場] オリンピックの商業主義の問題や感染症対策の観点から、オリンピックの制度改革を提唱することで肯定側が道徳的な境地に立たされるとは特に参加者は感じなかった。
- [特性② モデルの提示] 恒久のオリンピック開催地の場所を指定することに、困難を感じたとの選手の言葉があった。論題選定者である筆者は、オリンピック発祥のギリシャが主に選ばれと予想したが、必ずしも選手はそう捉えてはいなかった。結果として、選手が他の高校の選手から聞いたところでは、肯定側がどの場所にも指定しなかった対戦もあったという。
- [特性③-1, ③-2 論題の知識に関して] 聞き取りを行った選手とジャッジは、この点について肯定側・否定側のどちらかが特に不利になるとは感じなかったと答えている。1 人の選手からは「オリンピックについて知っていたら、それはそれで有利になったかもしれませんが、専門的な知識がなくても、新聞とテレビからの常識的な知識で十分に戦えました」という発言があった。

論題選定者の意図に反して、第 1 試合では以上の通り肯定側・否定側の間で勝利の割合に 2 倍近い差が起きてしまった。とはいえ、その原因の分析においては上記の通り、本研究で特定した「勝敗に影響を与え得る論題の特性 (肯定側の負担)」を踏まえることで、原因の特定の手がかり、そして今後の調査の方針を得ることが可能であった。

## 6. 結論と今後の研究課題

本研究では即興型の英語ディベート大会において、肯定側勝利の対戦と否定側勝利の対戦の割合に注目して、論題の公平性の確保のための方策を模索した。大会開催後に使用した論題が妥当であったか否か検証することは、場合によっては大会結果の信頼性に疑問を生じさせる可能性もあり、大会運営者の中には、ためらいを感じる者もいるだろう。とはいえ、本研究で試みた手法を一例として、まずは過去の大会結果の振り返りを行うことは、今後のより良い論題選定のために有益と考えられる。

特に初心者・中級者向け大会での論題選定においては、本研究で示唆された論題特性について考慮することが望ましいと言える。

本研究の限界の1つに、各論題が大会の序盤、中盤、また終盤のどの試合において用いられたものか考慮をしていない点がある。ランダムに対戦組み合わせを行う第1試合、パワーマッチによるチーム層の選抜がまだ十分ではない第2試合と、能力がより拮抗しているチーム同士が戦う予選終盤の試合では、論題特性の影響に違いがでると予想されるが、この点については今後の調査課題となる。

また今回の調査では、大会結果を主な分析のデータとし、選手自身がどう感じていたかについては、小規模な聞き取り調査を行うにとどまっている。英語教育において、意見文を作成する上での困難を調査した Zhu (2001)等の研究手法に倣い、学習者・大会に参加した選手自身がどう論題の困難度・公平性を認識していたのか、より詳細な聞き取り調査・質問紙調査を行うことにより、さらなる知見が得られるであろう。

また、本研究の大きな限界として、既に記した通り、勝敗に影響を与える論題の特性について、その抽出で行った聞き取り調査は1つの高校の英語ディベート部の部員と顧問に対してであり、対象が限られている点が挙げられる。質問紙などを用いて、高校の英語ディベートに関わるより幅広い層からデータを得ることが本来は望ましく、今回抽出した特性について、より客観性を確保した分析手法による再検証がまた求められる。

最期に、大会における論題と授業における論題との間では、その適切さの基準には違いがある点に触れる。上位層のチームを選抜するための大会予選の論題と、教育上の効果を第一とする授業用の論題は、当然その評価基準が異なる。宮脇(2019)では、準備型ディベート授業において、生徒自身に論題を作成させる作業を通してより深い学習を促す試みが報告されている。即興型英語ディベートの指導においても、論題の特性を教え、生徒自身に論題を選ばせることは、より良い議論教育の一助となる。

### 謝辞

本稿の改善のために、有益なご意見を頂いた査読委員の先生方に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、統計処理に関して頂いた助言について重ねて感謝申し上げます。調査に協力してくれた英語ディベート部の部員と顧問の先生、またディベートコーチの方に感謝いたします。

### 引用文献

- Council of Europe. (2018). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Companion Volume with New Descriptors. Retrieved from <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989> (2022年6月22日最終閲覧)
- Lee, C., Belesky, P., & Beaulé, É. (2021). Tabbycat. [software] Version 2.5.9. Retrieved from <https://tabbycat.readthedocs.io/en/> (2022年6月22日最終閲覧)
- Watanabe, H. (2016). Genre Analysis of writing tasks in Japanese university entrance examination. *Language Testing in Asia* 6(4), 1-14.
- Zhu, W. (2001). Performing argumentative writing in English: Difficulties, processes, and

strategies. *TESL Canada Journal*, 19(1), 34-50.

綾部 功 (2016). 英語ディベートの多様化と論題に関する考察：即興型ディベートと論題の多様化  
東海大学紀要 文学部, 106, 167-174.

小林 良裕 (2021). 即興型英語ディベートでのジャッジ間の評価の違い：高校生全国大会決勝の事例  
分析から ディベートと議論教育 — ディベート教育国際研究会論集, 3, 35-50.

小林 良裕 (2020). 高校での英語ディベート指導：10年間の総括 英語教育, 68(12), 36-37.

小林 良裕 (2018). 初めての英語パラメンタリーディベート: A New Introduction to Debating in  
English Book 2 埼玉: S.A.D.ワークス

小西 卓三・菅家 智洋・Peter J. Collins (2007). *Let the Debate Begin! Effective Argumentation and  
Debate Techniques (Teacher's Edition)* —英語で学ぶ理論的説得術 神奈川:東海大学出版部.

小宮山 和栄 (2018). 日本人の高校生のライティング力の発達におけるエクステンシブ・ライティン  
グの効果に関する実証的研究 博士論文. 京都外国語大学. 京都

酒主 維吹 (2021). 「HEnDA 全国大会結果一覧」 Retrieved from  
<https://moaibuki.wixsite.com/home/resorce/> (2021 年 9 月 25 日最終閲覧)

塩川 春彦 (2018). 「大学入試自由英作文論題におけるジャンル (テキストタイプ) の多様性の探求」  
『関東甲信越英語教育学会紀要』 32, 15-28.

鈴木 洋輔・行田 裕一 (2006). *Division Macro for NA. [software] Version 2.8.* Retrieved from  
<http://www.jpdu.org/resources/tab-software/> (2021 年 9 月 10 日最終閲覧)

末木 新 (2018). 高校野球における先行と後攻の勝率差の検討:20年間の夏の甲子園のデータ分析 体  
育学研究, 63, 595-604.

清道 亜都子 (2010). 高校生の意見文作成指導における『型』の効果 教育心理学研究, 58(3), 361-371.

薛 華民・張 小英 (2020). 中国大陸における日本語ディベート大会の現状及び問題点 ディベートと  
議論教育 — ディベート教育国際研究会論集, 2, 19-27.

内藤 真理子・西村 由美・竹内 茜 (2015). ディベートの論題選びについての実践報告 日本語教育  
方法研究会誌, 22(2), 32-33.

宮脇 かおり (2019). ディベート未経験者による論題作成—アクティブ・ラーニングの一手法として  
— ディベートと議論教育—ディベート教育国際研究会論集, 2, 41-54.

## 資料

2021 年度・第 10 回新緑杯 論題選定案とその意図 (論題選定委員会に筆者が提出した文書)

第 10 回新緑杯 2021 論題候補

R1: This house would designate one city to permanently host the Olympics.

R2: This house would aggressively prioritize the posting of female diplomats to countries with  
poor women's rights records.

R3: This house would ban the display of art created with the intended purpose or reasonably  
likely outcome of creating offence.

R4: This house believes that if technology permitted us to identify people who are genetically  
predisposed to commit crimes, it would be appropriate for the state to monitor them and

limit their activities.

\*すべて国際大会で過去に出題されたものから選んでいます。

それぞれの論題の意図

R1 は、練習をかなり重ねたチームと、そうではないチームが対戦する可能性があるため、試合が成り立つように、プラクティカルな内容で勝負できる論題にしました。オリンピックの論題を出すことが近年多いですが、東京大会の開催直前でもあるので最後のつもりで。

R2 は、フェミニズム系の論題から選びました。プラクティカルな内容中心で話せるようになっています。

R3 は、論題が関わる分野に多様性を持たせるために、芸術関連を入れています。芸術の社会での役割についての議論、また具体例については、意識的にリサーチをしていけば話せると思います。中級・上級者間での差をつけさせるための論題です。最悪、あまり知識のないチーム同士でも、おおまかな議論の形は作れるはず。

R4 は、政府の役割、criminal law の役割、個人の権利が制限するにはどのような要件が満たされている必要があるか、という原理・原則的な話を中心になる論題です。チームランキングの上位にいるチーム同士を、全力で戦わせるための論題です。